

## ディドロにおける

### 『アンシクロペディ』

—その思想形成における意義についての覚書—

竹村 孝雄

ディドロ Diderot, Denis (1713~84) ならびにダランベール D'Alembert, Jean Le Rond (1717~83) によって編集された『アンシクロペディ』、あるいは諸科学、諸技術および諸製造術の合理的な辞典『Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers』(以下『アンシクロペディ』と略記)は、当初の計画をはるかに上廻り、二ツ折本で、本文一七巻、図版一巻に増巻されて、一七七二年に完成した。それは、本文の第一巻が刊行された一七五一年以来、完結をみるまでに実に二二年の年月を要した。一七四七年、正式に編集者の地位についたディドロにとっては、その著述家としての道を歩みはじめてから生涯を終えるまでの四〇余年の生活の半ば以上を、この巨大な事業に捧げたことになる。(周知のように、ダランベールは、一七五九年、編集者の地位を退いていったが、それは、『アンシクロペディ』出版の特許が取り消

され、この巨大な事業が最大の危機に直面している時期の出来事であった。)

ところで、ディドロの思想の生成と発展の過程のなかに『アンシクロペディ』を位置づけようとする場合、何よりもまず、かれが寄稿者の一人として特定の項目を担当して執筆した諸論稿はもとより、編集者として、あるいは他の人の執筆した論稿を補足し、あるいは適当な執筆者が見当らぬ場合に担当した項目の、すべての一覧表が作成されなければならない。周知のように、ディドロが編集者として補った部分には※印が付され、寄稿者の一人として担当した項目は無署名(他の寄稿者の場合は、記号で識別されるようになってい)という原則が立てられているが、実際に内容に立ち入ってみると、ディドロの執筆した項目ないし部分を確認することは、多くの困難を示している。

ディドロ研究ないし『アンシクロペディ』研究の現状におけるこのような困難を自覚しつつ、なお、『アンシクロペディ』の、ディドロの思想の生成と発展の過程における意義を摸索しようとするとき、この巨大な事業の中核にあって、『アンシクロペディ』の総体としての課題についてディドロがどのように考え、どのような方法でその具体化をはかろうとしたか、ということについての見とおしを得ることは、欠くことのできない準備作業の一つである、といえよう。

筆者は本稿において、これらの点について、ディドロの思想形成という視点から若干の検討を加えてみたいと思う。

(1) 筆者が『アンシクロペディ』第一巻について知りえた限りでも、一パラグラフからなる短い項目で、冒頭に\*が、そして文末に署名(記号)が付されているものがある。また、無署名の項目は、匿名の執筆者の論稿も含んでいる。そして「同一の問題に関するいくつかの項目で、同一の人によって執筆ないし作成され、しかも連続して出てくる場合、記号を最後の項目の末尾にのみ記したのもある。」(『アンシクロペディ』第一巻、p. 24)ともかく諸論稿の真の執筆者は誰か、という問題は、『アンシクロペディ』の内容を問題にする場合、最大の難関であることは間違いない。

## 二

『アンシクロペディ』第五卷(一七五五年刊)の項目「アンシクロペディ」の冒頭で、ディドロは、『アンシクロペディ』の目的をつぎのように説明している。

「『アンシクロペディ』の目的は、地表に散乱した諸知識をあつめ、われわれとともに生存している人々にその一般的な体系を提示し、そしてそれをわれわれの後に生れくる人々に伝えることにある。このようにして過去の諸世紀の業績は、後の諸世紀にとって無益な業績となり果ててしまうことなく、われわれの子孫は、より一そのの学問を身につけることによって、さらに有徳にも幸福にもなるのであり、われわれとしても、人類に何らの寄与をすることなく生を終えてしまうことがなくなる

のである。」

右に明らかなように、ディドロにとって『アンシクロペディ』は三重の目的をもっている。すなわち『アンシクロペディ』は、何よりもまず現存の人間の諸知識の集大成でなければならない。しかしながらそれは、たんに人間の諸知識の集大成そのものではなく、人間の諸知識の相互の間の連鎖関係、すなわち一般的な体系を示すものでなくてはならない。このようにしてはじめて、『アンシクロペディ』として、同時代人に対して提示することができ、他方、それを後世に伝えて、人類の進歩に貢献し得るものとなるのである。

ところで人間の諸知識の連鎖関係の提示は、まずその前提としての諸知識の集大成が、でき得るかぎり何らの遺漏も省略もみられない、完全なものでなくてはならない。それは、決して一人の人間の所産ではあり得ず、「文筆家と技術者の団体 *les sociétés de gens de lettres et d'artisans*」の仕事でなくてはならない。そしてさらに、「人類の一般的な利益のため、そして相互の愛情によって結びつけられた人々」によって、はじめて可能になる。既存の諸アカデミーでは、能く為し得ないことであり、また、「政府」は、この種の事業に介入してはならない。それは、仕事の遂行を優遇するだけにとどまらねばならない。ただし、「君主は草原に城を構築させることは可能であるが、文筆家や職人の団体をつくることはできない。『アンシクロペディ』は命令によっては作成されないのである。」

『アンシクロペディ』の主体についてのこのようなディドロ

の考察は、注目を要しよう。技術者、職人の重視を含めて、これの市民的精神の表われとみることができよう。

つきに、それぞれの仕事の領域に専念するこれらの多くの人から提供された諸論稿ないし素材の、相互の連鎖関係を明示するためには、あらかじめ人間の諸知識の「系統樹 *un arbre généalogique*」がつくらねばならない。ディドロ・ロラン・ベールの『アンシクロペディ』の系統樹はベーコン Bacon, Francis (1561~1626) の学問の分類に着想を得、人間悟性の能力に関連づけて、作成されている。すなわち「記憶」、「理性」そして「想像」という人間悟性の三つの能力に対応して、それぞれ、「歴史」、「哲学」および「芸術」が区分され、さらに細かな枝葉が分れていく。

この「系統樹」は、ディドロが『アンシクロペディ』刊行趣意書 *Prospectus de l'Encyclopédie* (一七五〇年) (以下『プロスペクトゥス』と略記) のなかで提示し、若干の変更を伴って『アンシクロペディ』第一巻に収められ、ダランベール執筆の「序論 *Discours préliminaire*」で原理的に基礎づけられたものであるが、ディドロは、このような「系統樹」の作成方法をとった理由を、項目「アンシクロペディ」において、つぎのように述べている。

「われわれが見失うことのできぬことは、つぎのとおりである。人間、すなわち考え、熟慮することの存在を地表から追放した場合、自然のあの感動的な、そして崇高な光景は、もはや悲しい、黙して語らぬ光景でしかなくなる。もろもろの存在を興

味あるものにするのは人間である。……われわれが、われわれの仕事に従わしめようとしている一般的な区分を人間の主たる能力のなかに求めた理由はそこにある。……人間は、そこから出発し、また一切をそこに帰着させなければならぬ唯一の極である。」

人間を、一切の思考の中心に据えるという思想は、いうまでもなく近世の思想的発展の所産である。このような人間中心の思想が、先に触れた市民的精神に支えられて、ディドロの思想生成の過程のなかで、どのようにして形成されてきたか、という問題が次節のわれわれの課題となる。

- (2) *Oeuvres complètes de Diderot*, éd. par J. Assézat (et M. Tournoux), 20 vols., Paris 1875~77, Tome XIV, p. 415. (以下「Diderot」の引用は「Diderot」の巻数をローマ字で示す。)
- A. T. と略記して巻数をローマ字で示す。

(3) *Ibid.*, p. 420.

(4) *Ibid.*, p. 421.

(5) *Ibid.*, p. 453.

(6) ダランベールは「序論」のなかで、ロック Locke, J. (1632~1704) の感覚論に立脚しつつ、「系統樹」の理論的な説明を試みている。ユベールの指できするように、「この「序論」は「人間知識の発展の法則と分類を人間の意識の成立のなかに求めている。かくして知性の発展、さらにより一般的に文明の動きに関する場合、基礎となり出発点となっているのは、常に人間本性の理論であった」(Hubert,

R. : Les Sciences sociales dans l'Encyclopédie. Paris, 1923, p. 170.) の France。

### 三

デイドロは、一七四〇年代初頭からその著述活動を開始するが、イギリスのチェインバーズ Chambers, Ephraim (1680~1740) の「サイクロペディア」、あるいは諸技術および諸科学の普遍的な辞典 Cyclopaedia, or an Universal Dictionary of Arts and Sciences, 2 vols., 1728」の仏訳、刊行を企画して、た出版業者から『アンシクロペディア』の編集を委ねられるまで、ゴットマン Stanyan, T. (1677~1752)、シヤフツベリ Shaftesbury, A. A. C. (1671~1713)、そのジョン・ホームズ James, R. (1703~?) の著作の仏訳を刊行し、他方、一七四六年の「哲学的思索 Pensées philosophiques」には、これを一連の哲学に関する作品、数学に関する覚書その他、二編の小説を執筆してゐる。そして一七四九年には「眼の見える人々のための、盲人に関する書簡 Lettre sur les aveugles à l'usage de ceux qui voient」(以下「盲人書簡」と略記)を公にしたが、この著作の刊行は三ヵ月余にわたってかれをヴァンセンヌの獄舎に幽閉することになった。

デイドロは、この「盲人書簡」において唯物論的な世界観に達し、無神論を表明している。『アンシクロペディア』刊行の課題と方法を『プロスペクテュス』において展開する直前に確立されたこのデイドロの思想の特色をみてみよう。

かれの思想形成の出発点としてとくに注目をしなければならぬのは、一七四五年に公にしたシャフツベリの著書の仏訳、「道徳哲学の原理」、あるいは真徳と美徳に関するエッセイ Principes de la philosophie morale ou Essai sur le mérite et la vertu」である。

この翻譯には脚注、<sup>7)</sup>というかたちで「諸考察」が随所に付されているが、その内容は、デイドロ研究家の一致して指摘するように、翌一七四六年の「哲学的思索」に継承・展開されている。

この翻譯にとりかかる前後に、デイドロは、ルソー Rousseau, J.-J. (1712~78) を介して、コンディヤク Condillac, E. B. de (1715~80) と親交を結んでいる。ロッキの感覚論を批判的に継承・発展させたコンディヤクの「人間知識の起源についてのエッセイ Essai sur l'origine des connaissances humaines」が公にされたのは一七四六年のことであるが、デイドロが、人間の知識論という論理的な問題よりも、同じくロッキの影響のもとにあつて道徳哲学に専念したシャフツベリに着目したことは、注目されてよい。つまりデイドロの思想の出発点は、まさしく道徳の問題にあつた、ということを物語っている。かれ自身も、その翻譯の動機をつぎのように述べている。

「われわれは、道徳に関する長たらしい論文を見出すには事欠かない。しかし人々は、道徳の基本原則を提示することには想ひいたっていない。<sup>7)</sup>」

デイドロが自己の思索の課題として道徳の問題を中核に据え

た背後には、当時のフランスの歴史的・社会的現実への痛烈な批判の精神がある、といわなければならぬ。かれは、近世初頭以来の、フランスの内乱を念頭において、「国民の半分が信仰心によって他の半分の血を流して喜び」、「あたかも宗教的であろうとして人間であることをやめねばならなかった」と指摘している。したがって、人間の、人間相互における行為を規制する道徳は、何よりもまず、宗教的なファンティスムから解放されて確立されなければならない。デイドロは、宗教的には理神論に立脚し、道徳の基礎を人間の自然的本性に求めて利己的な本能と利他的な傾向との調和のなかに成り立つとしたシャフツベリの道徳論を、自己の道徳論の出発点にしたのである。

しかしながらデイドロは、シャフツベリによって開かれたこの道を、そのまま進んではいかなかった。シャフツベリの道徳論は、すでに絶対主義体制が「名譽革命」を経ていわゆる立憲政体に移行し、そこに市民社会の政治的自律性が確立されつつあったイギリスの土壌の上に成立したものであった。これに反し一八世紀中葉のフランスでは、ようやく絶対主義体制の諸矛盾が露呈しつつあったとはいえ、王権は、なお宗教的な権威に支えられていた。このような現実を前にして、デイドロは、道徳の問題を体系的に追求するに先立ち、宗教的な権威をその根底から批判することに第一の課題を見出したのであろう。「哲學的思索」は、冒頭の部分でシャフツベリの影響のもとに、「情念」を人間の行為を支えるものとして高く評価している

が、この作品の大半は宗教的現実や神学の批判にあてられている。

かれはこの作品において「理神論」の立場に立っているが、同時に無神論への少からぬ関心を示している。とりわけヴォルテール Voltaire, F.-M. A. dit, (1694~1778) ぶその「哲學書簡あるいはイギリス書簡 Lettres philosophiques ou Lettres anglaises, 1734」や「ニートン 哲學綱要 Elements de la philosophie de Newton, 1738」で紹介したニートン力学を基盤とする理神論の、無神論に対する説得力に対しては、すでに懐疑をいんでいる。デイドロの理神論の特色は、一言にしていえば、生物学的・博物学的な自然科学の進歩が明らかにした自然現象、とりわけ「胚種の発見」等の生命現象に、神の存在証明の論拠を求めようとするところにあった。

「盲人書簡」において成立する唯物論的世界観も、このようなデイドロの方法的な特徴に貫かれている。そして生物界の現象に見出される畸型物 monstres の、さらにいえば自然における偶然の所産の、シンボルに他ならない盲人の数学者ソンダースンをして、全知全能の神の存在を否定する言葉を述べさせるのである。

それと同時に、この作品のなかでかれが唯物論的感覚論を展開していることが注目されなければならない。かれは、人間の知識の源泉が感覚にあること、そして感官の対象となる物質的な世界の客観的存在を確信しながら、ロクかないしコンディヤク の感覚論が、バークリー Berkeley, G. (1685—1753) の主観

的観念論と同じ誤謬に陥入る危険を指摘している。

デイドロは、ここで外的世界の存在に対する確信の論証を試みていない。かれのこの確信は、そのかぎりでは素朴なものであった、といわなければならないであろう。

しかしながらわれわれは、かれが、「盲人書簡」を公にする以前に『アンシクロペディ』の編集を手がけており、とりわけ「機械技術」に関する項目を執筆するため、文献を渉獵し、「仕事場」を訪れ、「技術者」や「職人」と対談し、資料の収集にあたっている、という事実を注目しなければならぬ。そしてかれがこのような体験を基にして執筆した項目「技術」は、『プロスペクテュス』の系統樹に向けられた批判に対する反駁として公開された「ベルティエ神父宛書簡 *Lettres au P. P. Berthier, 1751*」に伴われ、本巻に先立って公表されたのであるが、それは『アンシクロペディ』の内容見本の意味と同時に、『プロスペクテュス』で論証されなかった人間の諸知識の連鎖関係を理論的に補う意味をもっていた、といえよう。事実、この論稿の冒頭では、諸科学、諸技術が、ともにその起源を自然に働きかける人間の実践のなかに有することが明らかにされている。

この項目は、とりわけ「機械技術」が『アンシクロペディ』のなかで占めるべき位置やその意義についての理論的な展開であるのみならず、そこには分業の意義やマニファクチュアへの言及もみられ、また技術の本質に関する理論としても「技術論」史上、注目されている論稿である。それはともかく、ディ

ドロがこの項目のなかで、人間は自然の支配者ないし解釈者に他ならず、人間の力は「自然をひきよせたり遠ざけたりすることに帰着する」と確認していることは、それが技術に関する深い洞察にもとづいているだけに、重みのある発言といわなければならないであろう。

デイドロの、感覚的経験の世界の存在に対する確信は、素朴なものではあるが、他面、人間の生産的実践の意義の自覚に支えられていたことがその特色である。

(7) A.T. I, p. 11.

(8) Ibid, p. 18.

(9) デイドロがヴァンセンヌの獄舎に幽閉されていたとき、出版業者が提出した「釈放歎願書」(A. T. XIII, pp. 140-141.)を参照。

(10) デイドロは技術を「同一の目標に向って協働する道具」と規則の体系」と定義づけているが、このような把握の仕方、フーリーリン *Byxapm, H. M.* の技術論の先駆的なものとしての地位を与えられている。三枝博首「技術の哲学」・一九六〇年、二六〇ページ。中村静治「技術の経済学」・一九六〇年、三九ページ。  
(11) A. T. XIII, p. 362.

四

前節までにみてきたところを要約すると、つぎのようになるであろう。

『アンシクロペディ』の目的の中核であった人間の諸知識の一般的連鎖という認識は、デイドロの場合、人間的な道徳の原理を確立しようとする問題意識から宗教ないし神学の批判に進んでいく過程で形成されてきた唯物論的世界観と、おそらく『アンシクロペディ』の編集者として、ペーコンの先駆的な遺産を継承しながら『アンシクロペディ』の方法と原理を追求し、とりわけ「技術」の問題を視野にとりいれて思索していく過程で確立された唯物論的感覚論を、根底にもっている、ということである。

与えられた紙数に余裕がないので、問題の発展への見とおしを記して本稿を閉じたいと思う。

すでに指摘したように『アンシクロペディ』の方法論的基礎の理論的な説明は、ダランベールの「序論」に委ねられた。かれの所論は、感覚論の立場で貫かれている。その立場から、かれは、デイドロと同様に外界の存在については疑っていない。しかしながら数学的自然学者であったダランベールは、実験自然科学の対象となる広大な領域があることを自覚しつつも、延長と不可入性として定義される物体の世界をあくまで問題にし、そ

の存在証明については懐疑的な立場（現代的に言えば実証主義の立場）に到達する。ダランベールにとっては、「運動の本性はなぞである。」「一言でいえばかれら（哲学者たち）が物質と物質を表現する諸性質とについてかたちづくる観念を深く研究すればするほど、この観念はますますあいまいになり、かれらの手に負えないものになるように思われる。」

デイドロは、その唯物論的な立場からも、そしてその素材となっている自然観からしても、ダランベールの所論には満足し得なかった。そこで、将来の自然科学の中心を実験自然科学に求め、観察・反省そして実験にもとづく科学方法論を提示するとともに、かれが唯物論的自然観を深めていった一つの成果を示している一七五三年の「自然の解釈について De l'interprétation de la nature」が、『アンシクロペディ』の方法論との関わりにおいて、われわれの視野に入っなくてはならないのである。

(12) Encyclopédie, Tome premier, 1751, p. viij.

(一九六三・二・二七) (一橋大学大学院学生)